

The Snows of Kilimanjaro

試 論

田 中 博

Kilimanjaro is a snow-covered mountain 19,710 feet high, and is said to be the highest mountain in Africa. Its western summit is called the Masai 'Ngàje Ngài', the House of God. Close to the western summit there is the dried and frozen carcass of a leopard. No one has explained what the leopard was seeking at that altitude.

—— キリマンジャロは、高さ19,710フィート、雪に覆われた山で、アフリカ大陸の最高峰といわれている。西側の頂上はマサイ語で“Ngaje Ngài”（神の家）と呼ばれている。この西側の頂上に近く、ひからびて凍りついた豹の死体が横たわっている。こんな高みにまで豹が何を求めてやってきたのか、誰も説明できない。——

というこの作品の冒頭の一節や

Then they began to climb and they were going to the East it seemed, and then it darkened and they were in a storm, the rain so thick it seemed like flying through a waterfall, and then they were out and Compie turned his head and grinned and pointed and there, ahead, all he could see, as wide as all the world, great, high, and unbelievably white in the sun, was the square top of Kilimanjaro. And then he knew that there was where he was going.

—— 機は上へのぼりはじめた。東方へ向って行くらしい。間もなく機の周囲が暗くなり、暴風雨に包まれてしまった。雨が烈しく叩きつけ、機はまるで滝のあいだでも潜りぬけて行くようであった。やがてそのなかをくぐりぬけた。コンプトンはふりかえって、にやりと笑って、前方を指さした。前方に、全世界のように幅の広い、巨大な、高い、キリマンジャロの突

兀たる頂きが、陽光を浴びて信じられぬほど純白に輝きながら、その全容をあらわしているのだ。そのとき彼は自分の目的地はあれだなと気がついた。——

という結末の一節を取り上げて、Carlos Bakerが指摘した、山や雪が、ヘミングウェイにあっては、理想とか幸福のSymbolであるとする解釈：すなわち、この豹がHarryの象徴で、Harryは、理想とか幸福をもとめて雪の山頂にむかったという解釈が成り立つ。そして、Hemingwayの場合、雨が不幸の象徴だということから、Harryが不幸を乗り越えて死を迎えたというような解釈をはなれて、むしろ、“The Outsider” (1965) を書いた C. Wilsonが、追い求めた、人間存在の在り方を、この“The Snows of Kilimanjaro”のHarryに求めたいと思う。それには、まずそのアウトサイダーとはいかなる意味をもっているのかを説明する必要がある。だがしかしそれは決定的な一つの概念を持ったものではなく、Obsessedmenであり、それは同時に against society の立場で、人間の存在を追い求めた人々を、包括的に、アウトサイダーと呼んだにすぎないのである。それでは、この“The Snows of Kilimanjaro”の主人公Harryの中に“Outsider”を求めて、その存在のあり方を考究したい。ではHarryとは「すでに述べたように、ヘミングウェイの短篇にはニック・アダムスをはじめとして、絶望と虚無の人物が多く登場するが、このハリーはまさにヘミングウェイその人だといってよいようだ。……」高村勝治著「Hemingway」P.95

まさにこのHarryの絶望にこそ、「人間の存在とは何か？」の問いが生れてくる源泉ではないだろうか。それでは、そのHarryの絶望が何であるかを調べることによって、この試論の結論をみいだしたいと思うのだが、その前に、

HarryとHemingwayとの関係について、前述の高村氏の意見を含めて、大橋健三郎氏の

「もち論、僕は、ハリー＝ヘミングウェイという定式に不用意に飛びつくつもりはない。ハリーはヘミングウェイに似た人物ではあっても、ヘミングウェイそのものではない。彼はむしろ、30年代において新しく脱皮しようとしていたヘミングウェイが、いわばその脱皮のいけにえとしてあとに残した、死滅すべき一身分であったにすぎぬだろう。……」

大橋健三郎著「危機の文学」P.193

を主題の前の前提の一つとして考えておきたい。それでは、Harryの絶望がどのようなものであったのかを、“The Snows of Kilimanjaro”の中から順を追って、取り上げて、Harryがその問題を通して、どこまで、人間の存在をひろげていったか。又、大橋氏も前述されているように、HemingwayがHarryをいかなる脱皮のいけにえとしていったのかを取り上げることによって、存在の問題の核心にふれたいと思う。

Now he would never write the things that he had saved to write until he knew enough to write them well. Well, he would not have to fail at trying to write them either. Maybe you could never write them, and that was why you put them off and delayed the starting. Well, he would never know, now.

——よく書くために、十分知りつくすまで書くまいと思っていた事どもも、いまとなっては、ついに書くこともなかるう。してみれば、書こうと試みて失敗することも、もうないわけだ。おそらく、生きていても、どうせ書けなかったかもしれぬ。だからこそ、そういったものを傍へ押しつけ、書き出すのを、のぼしのぼししてきたのだ。書けたかどうか、いまとなって

は、もうそれもわからない。……—

作家であるHarryの絶望は、死を前にして、「書けなかった」ことである。その様子は、「書けなかった」というSentenceを、この“The Snows of Kilimanjaro”から、捨い出せば、それは増々、明白となろう。

That was one of the things he had saved to write, …… P.11

But he had never written a line of that, …… P.12

and he had never written a word of that. Nor of Monte Corno, nor the Siete Commun, nor of Arsiedo. P.12

But, in yourself, you said that you would write about these people; about the very rich; that you were really not of them but a spy in their country; that you would leave it and write of it and for once it would be written by someone who knew what he was writing of. But he would never do it, because each day of not writing, of comfort, of being that which he despised, dulled his ability and softened his will to work so that, finally, he did not work at all. P.15

——だが実は、もう書けなくなっていたのだ。しかし心の中では、おれはいつかはこういう人間どものこと、大金持の連中のことを書いてやる、おれは実際こういう連中に属する人間ではなく、むしろ、そういう社会のスパイなのだ。その社会をはなれて、それについて書くとすれば、どう書くかを心得ている一人の作家によって、一度はともかくそれが書かれたということになる、そう心でいった。だが彼は、ついに書けなかった。書くことをせず、ただ快樂にふけて、かって彼が軽蔑したような人間にな

ってしまった毎日の生活が彼の才能を鈍らせ仕事への意欲を弱めてしまったのだ。こうしてついに何も書くことができなくなってしまったのだ。——

He had found that out but he would never write that now, either. No, he would not write that, although it was well worth writing P.22

There was so much to write. He had seen the world change; not just the events; although he had seen many of them and had watched the people, but he had seen the subtler change and he could remember how the people were at different times. He had been in it and he had watched it and it was his duty to write of it; but now he never would.

——書くことは沢山ある。おれは世の中の変化を眺めてきた。それも表面の事件だけではない。事件も沢山見てきたし、人間も観察してきたが、それよりもおれは、もっと微妙な社会の変化を見てきたはずだ。時代の変化につれて人間がどう変化するかを、彼は思い出すことができる。自らその中であって、おれは観察してきたのだ。それを書くのが、おれの義務だ。だが、おれはもう書けまい。——

No, he had never written about Paris. Not the Paris that he cared about. But what about the rest that he had never written? P.26

That was one Story he had saved to write. He knew at least twenty good stories from out there and he had never written one. Why? P.27

作家Harryにとって書くことが、生そのものであることは、彼自身にもわかりきっているは

ずだ。それなのに、なぜ彼がこんな状況に陥っていたのかは、次のように表現している。

He would never do it, because each day of not writing, of comfort, of being that which he despised, dulled his ability and softened his will to work so that, finally he did not work at all.

同じことを Colin Wilson は“Beyond the Outsider”の中で次のような引用をもちいている。——ランボーは「人間がけっしてそこから脱れられない幸福のうちに永久に生きるように宣告されていることを悟って愕然とした。この発見は彼をふるえあがらせた。というのも、彼は、幸福が真の実存への障害物であるということも知っていたからである。幸福はわれわれに安全感と安楽感を与え、それらによってわれわれの精神は、元来がひじょうに怠惰なもので、退いて、のうのうと居眠ってしまうのである。——

Harryは“幸福が真の実存への障害物”であることは、彼自身、気づいており、それをいまいましく思い、又それによって彼自身と、その幸福——comfort, being that which he despised——を切り捨てようとしている。その二律背反とあせりは、Harryに次のような言葉をのべさせている。“‘your bloody money!, said he.’ “‘your damned money was my armour. My Swift and Armour’.” P.13 P.14 “‘your rich bitch. ………’” これほど愛人に悪態をついても、それは、増々彼自身に、自己の幻滅を与えるにすぎないのである。

Nonsense. He had destroyed his talent himself. Why should he blame this woman because she kept him well? He had destroyed his talent by not using it, by

betrayals of himself and what he believed in, by drinking so much that he blunted the edge of his perceptions, by laziness, by sloth, and by snobbery, by pride and by prejudice, by hook and by crook. What was this? A catalogue of old books? What was this talent anyway? It was a talent all right but, instead of using it, he had traded on it. It was never what he had done, but always what he could...

——冗談ではない。彼の才能は彼自身が破壊したのではないか。あの女が彼を楽に暮させたからといって、どうして彼女を咎められよう？彼が才能を破壊してしまったのは、自分でそれを使用しなかったからだ。自分自身と自分の信じていたものを裏切ったためだ。感受性の切尖を鈍らせるほど大酒をのんだってだめだ。懶惰のためであり、やくぎなためであり、俗物根性のためであり、高慢と偏見のためであり、その他ありとあらゆる悪業のためだ。だが、これは何だ？本の目録か？それはともかく彼の才能はどうか？たしかに一つの才能ではあった。だが彼はそれを使おうとはせず、売り物にしてきたのだ。彼の才能は、実際に成しとげた仕事ではなく、つねに、おれはやればできるのだということにすぎなかった。——

精神的腐敗から立ちあがり、Harryの真の姿にたち帰るには、以上のような状況から、逃げ道をさがさねばという決意をさせた。

They had made this safari with the minimum of comfort. There was no hardship; but there was no luxury and he had thought that he could get back into training that way. That in some way he could work the fat off his soul the way a fighter went into the mountains to work and

train in order to burn it out of his body”

Harry、その背後にいるHemingwayのこの敗北感と人生への絶望のふんいきの中で、又、この“The Snows of Kilimanjaro”の中で唯一の逃げ道は、この数行の文章にしかこめられていないと私は考える。それは又、後に、——原始、洞窟生活人のように生きよ。なるべく少ししか考えるな。食べ物と、性と、原始的スポーツとを最大限に用いよ。とりわけ考えることを避けよ。——に行きつく、一連の発端と考えられる。そして又、Hemingwayは他の場所で、よりアクティブではあるが、それだけに、いさか荒っぽい表現で次のようにも言っている。——が、なんといってもたたかわなければならぬ。……女にしたって、たたかい取ってこそ意味があるんで、じゃなきゃまるっきり無意味ですよ。……魚にしたって、たたかったあげくひき上げるんでなけりゃ、シュークリーム人種のためにあるようなもんです。相手に反撃のパンチを食らわしてやろうとするのに、グロッキーになっているんじゃ話にならない。実人生のむずかしい問題についても同じことが言える。——

こうしてHarryはSafariによって、本当の人生を生きたいと考えたのだが、その悲劇的終局は、まるでつまらない一つのミスによって、死を迎えねばならなくなる。これこそ、Hemingwayが彼の著書“死者の博物誌”の一節：

The first thing you found about the dead was that, hit quickly enough, they died like animals.…… I do not know, but most men die like animals, not men.

——死者について気づいた最初のことは、ひどい射れ方をすると獣のように死んでしまうことだ。……しかし、多くの人たちは動物のように死ぬのであって、人間のようにではな

い。——

を想起させる。

And now life that she had built again was coming to a term because he had not used iodine two weeks ago.——

iodine をぬることをせずに、ただそれだけのことで、エソを起し、Harry は死をむかえねばならなくなる。

And just then it occurred to him that he was going to die. It came with a rush; not as a rush of water nor of wind; but of a sudden evil-smelling emptiness and the odd thing was that the hyena slipped lightly along the edge of it.

—— すると突然そのとき、自分はいま死にかけているのだという思いが閃めいた。その思いは急激に襲ってきた。水の流れや風のような襲い方ではない。だしぬけに襲いかかってくる。いやなにおいのする空虚さだ。そして奇妙なことに、あのハイエナが、その空虚さのへりに沿って、するりとかすめすぎたのである——

めざめ、人生の戦いに立ち上がった Harry にのがれられない、死が、近づいてくる。Hemingway は “The Snows of Kilimanjaro” でも、敗北と絶望の方が、生にまさっているようである。また死をまえにして、宗教による救いを、考え、又は、それによって、この生と死、肉体と精神の、二律背反の救いを求めるという方向もあるのだが、Harry にあって、それらしい、Sentence をこの作品に、しいてさがしてみれば、P.28 に死の床で、回想する場面があるが、

Shoot me, Harry. For Christ sake shoot me. They had had an argument one time about our Lord never sending you anything you could not bear and someone's theory had been that meant that a certain time

the pain passed you out automatically.

But he had always remembered Williamson, that night. Nothing passed out Williamson until he gave him all his morphine tablets that he had always saved to use himself and then they did not work right way.

—— おれを射ち殺してくれ、ハリー。後生だ、射ち殺してくれ。みんなで、あるとき、神は人間の耐えられぬようなものをわれわれに課するものかどうかについて議論したことがあった。それは、適当な時期がくれば、それになれて苦痛は自動的に消え去ってしまうという意味だ、というのがある男の意見だった。だが、彼はいつも、あの夜のウィリアムソンから消え去りはしなかった。しかもその錠剤でさえ、すぐには効目はなかった。——

そして、それは救いでなくて、かえて *most men die like animals, not men.* を再認識させるのみである。Hemingway は彼の過去から、又それは、父の自殺を含めて、死というものを、理性の目で、直視してきた結果であるかもしれない。彼は一つの死に対する哲学をもっている。“The Snows of Kilimanjaro” の Harry およびこの作品の初めにある、*the dried and frozen carcass of a leopard* の中に、彼の死の、むしろ逆説的に、生の実存性が、描かれているといった方が、この作品の評価にあたらなだろうか。Hemingway が Harry に又 leopard に、ぬけがらをのこして、立ち去った、一つの墓標を見ると考えたいのである。死は突然に、ドッサと落ちてくるし、その死はまるで動物のようにおそってくる。理性の人にも、情の人にも、はたまたヒューマニストにも。悪人も善人にも。人を選ばずにやってくる。それだから、だからこそ、彼はその死に対

して、彼の哲学を作り上げたのだろう。

He had been contemptuous of those who wrecked. You did not have to like it because you understood it. He could beat anything, he thought, because nothing could hurt him if he did not care.

—— 気が挫ける人間を彼は軽蔑していった。何かを理解したからといって、それを好きにならねばならぬということはないのだ。おれは何でも打ち負かすことができる、と彼は思う。気にしさえしなければ、どんなものにも傷つけられるということはないからだ。——

most men die like animals, not men.

なのだ。死に対しての緘念、それ以上に、ニヒルは生れてこないのだろうか。サルトルは「人間は徒勞の情熱」と表現した。肉体と精神の二律背反から逃れるところに、死があったのでは、それは解決にはならないのである。

Hemingwayはこの一文の最初に引用した No one has explained what the leopard was seeking at that altitude. にあるように。何を求めたかは、問はずに、確かに、動物のように死ぬのではあるが、真に実存するためには、“Ngàje Ngài” を目ざして、生き行く中に真の実存があるのだというのが、Harry の又 Hemingway 自身に言いませ、そう信ずる以外にないとする結論のように見える。事実、Hemingwayは彼の最後の作品“The Old Man and The Sea”で老漁夫サンティヤゴについて、「人間は滅ぼされることはあっても打ち負かされはしない」と書いている。それは敗北に臨んでの人間の尊嚴のストイックな主張でもある。同時に行動的outsider, Harryの真の実存の道ではないのだろうか。それでも彼の結論は弱い生としかとることができない。Hemingwayは彼の生の哲学は、一生涯この域から脱出来出ず

に、みじめな死を、みずから演ずることになってしまったと、考えることも出来る。

参 考 資 料

The Snows of Kilimanjaro and Other stories . . . by Ernest Hemingway

Penguin Modern Classics

ヘミングウェイ短篇集

大久保康雄訳 新潮文庫

世界文学全集<ヘミングウェイ>

大橋吉之輔訳 河出書房

ヘミングウェイ——20世紀文学案内——

研 究 社

危機の文学——アメリカ30年代の小説——

大橋健三郎著 南雲堂

The Outsider

Colin Wilson

Beyond the Outsider

中村保男訳 竹内書店

Hemingway

高村勝治著 研 究 社